へ13
3045
1

へ13
3045
1

古人曰小説者史之餘也採聞
巷之故事繪一時之人情妍媸
不爽其報善惡直剖其隱使天
下敗行越撿之子惴惴然側目
而視曰海内尚有若輩存好惡
之公操是非之筆盍其改志寥
慮無貽以身後之辱予然此語
平日暇則遊眼于稗官小説一

村 へ13
3045
15

日有客談永享年中在秦織部
者以幻術絡黨計亡足利家事
甚詳矣吊喜其奇聞則以俚言
俗文録之爲十回然懶性不設
稿倉卒下筆豈足傳世哉竊備
吾遺忘而已安永七年戊戌季
秋椿園主人書

不坤 文庫

両剣奇遇惣目録

第一回　腐儒碎硯辞庸主　奇童求劔欺愚民
第二回　曹吉街上讀兵書　監物洛中誇劔術
第三回　滝行爲唱和
第三回　刀法試高下
第四回　相劔説吉凶
第五回　修法退讐敵　織部偽名見範佑　山懸振勇縛安倍

八文字屋 蔵

第六回　織部楽與取鯉魚
第七回　雪江忍恥爲娼婦
第八回　神威驚賊去
第九回　侠氣爲妓死
第十回　奪劔鬧僧坊
　　飛矢辞客亭
　　愛児富賈逢災厄
　　貪財汚吏異身首
　　誠心切孤婦報恨
　　妖術破三士殞命

両剣奇遇目録畢

両剣奇遇巻之一

第一回　腐儒碌碌辞庸主　奇童求剣欺愚民

釋名曰剣ハ撿なり非常を防撿する所以なりとも良工鐵を擇び心を正くして鍛錬するものハ必ず靈ありて身を護し切業を助く始まどき高あるの剣ハ德者の人ホ屬して光を發せども小人取るのもホもちてハ鈍刀ホひとしく差なきのみにあらず反て災禍を生ずるの種となるべし男子常ホ是を常るハ惡を制し善を行ふこゝを志さゞ志んぐ爲るべし韓文公の祝毋も我をして邪心ホのしむといつゝ爰ニ雌雄の宝剣を得ゝ叛逆を多くして身を亡せ一人

の豪傑ありて来世を待つべき為に稱光院の御宇編纂
乃爰領足利持氏は文学を好く仕へ清井主馬くの者
あり博く經典に通じよく詩章に巧なるのみ心正しく
素より聖賢の道を修むが如くあまねく東に利祿を念り
便舌利口にして諛諂を好しかるに持氏常に媚を其
將軍に稱ずるを其媚を其びに寵遇すかぎりに持氏
常に秘蔵する希代の硯にして朝鮮の産者朴敦之
が推乃へ来れるを名を童泉研と云ひ硯池に注ぐ水
湧くが如くにして敢て涸るることなし一日持氏主馬を近
く招き我異國傳来の寶硯あり久しく秘蔵せり
いざ之を試ん詞藻を以て之を賞ずべしと

主馬仰せを承り一篇の記を作りて奉る
ん之を主馬に授く辭を尽し不文經史を
如きもの崔敦礼希世の孫なり辭を屈せず宿儒頑師
乃文名を者に命じ事を論ずるに
世が高下を作る所を知れば則ち硯を尊ぶ貴あり
ある日主馬の傳を知るを以て喜を揮ひ思ひを
凝すべし重箱を出して硯を
一時の眉目世に顯はし書を作る命を頒ち雙手
に硯を捧て持氏の別館幽靜なる一間に入室に住て己み
稿を起さんとするが傳に今古事あり奇宝を文藝
の徳ふかくして多ふ如き事よりも独りて又なるものを

柔しなるをつゞ折しも裏ふして孫兩沛然として
思ひかゝるすも大なる雷鳴一聲耳もゆふるがごとくなる
よ驚きて持たる硯を打こゝ儿下におくるゝ忽ちの
碎くるゝ小王馬ハ大よ仰天し立体を汗を流し面色土乃
如きに変じ如何ハせんと あたを見ふらしに涙ぐる訴ゝる
言葉を新たに雷鳴よ驚きて碎しといで大なる独唐
何をふく人よ面を合きんや自殺せんよハ如じ心を思ひ定
めこ小刀を腹ゆ突そんとたちふしぶ傾ける屏風ゝ
優人鉢ゝ詩を乞ふる画のひるまに眼付て忽ち一計
を生じ人ゝ言葉の死をきんよう辯舌をぬるひ命力を
車ゝくこ主人を欺きゝ怒を免ずんで自殺せん

りけく命をゆるを硯を授けぢ一篇の文を綴る碎きゝ
硯を持氏の前ゆ投いづまべ並居る近侍も大よ驚き主人乃
怒ゝ言かんと息をはめて抑へふ小王馬ハ恐れたりゝまま
仕し人今で生死の場と心をたゞ決て語るまゝ小王君の命を
受ゝ言小鄙稽を起さんと思ふ云ふ硯乃中
ゝ濛ゝ烟霧の如き宝玉のごゝて産出し大ゝ
昼夜しに忽ち雷鳴大小一あゝして石西隙小碎を一寸ゆ
雷鳴ゝ碎ゝ東のゝ底ゝ丈ゝ碎ゝ
玉帝に飛騰ぬ是酷高誠ゆ以ゝ龍ゝ言葉の弟
一ゆて変化て雲をかゝく方寸ゆ舟を浮ゝ上天の河を渡ゝ
例かゝるゝと強ゝ信が紀ゝ言ハ北夢瑣言

を龍雷神の捕へんことを恐れ逃匿す扶桑拾遺記に本
朝に入て記す又老学菴筆記に始の中に於の潛り去る
迹てこれを書に載ること多し蓬萊の石の見ずの形る中
にて石の形の水湧出るいまだつんや詩に草に潛むゆゑ水
に居ぎるまの形り今漫みに於変化の論一篇を著して電論に
絡つて迹よく表して居が見なしげを明らかにもとう
居不業にして頑まなる中みかに変あきべ迷に死を形ふと
も悔る心形と詞懸河を飛して演説する扶持氏を言を
吟ずまを又をを示理り明るきべ結ふ心なく朴敦之が童子石
とを名付ふも世がいふ示して心同じかべとひるまてひ結か
如りの氣色もなく却て恍惚を楽び住を笑びてきを

なきべこるを八名紀命を逃きを恐び媚て住へるまに
居あまを偽りなるこれをもつて扶氏を告る考ひるまきべ
大ふ恐まを和市に生まして他邦に行性を変じて奏とし
名を宗補と称るあ孤奏せが居補の時も山るきべ尾あ
雅面の名りに居をトし農耕を業にを也をもべ
てこれを一子ひる名と宗吉と幼さより聰慧群兒
に抜きに八父業に絵画の通達をおゆゆふ一をゆて十とをふ
才ひるまて十業の時父面中に蓮の花をひるをうて動き
に世一詩を賦せんやくひるる声ふ意じく

海棠巧笑畫簾前　片々迎風霖雨天
宛似昭君辞漢去　胡塵日々減嬋娟

と一絶を識し給ふ父大きに驚き死生の後天下に名を馳せ文
人墨客と交りを結ぶ家に宋書つくづくと沢山にあるが中に
て八進士乃茅の法あるて文学を長ずる人ハ切名成安りなる
事国家を今繰ひ給ふ韓柳を壁を叫ぶもの多しげの死録を
得て己れ是れ我が子ぶ弟子ぶ門生ぶ業達成れ求るみな
ら彫琢を熟練すべあらず思ふ心射けば詞章ハ
眼底に浮ぶ眼前に見るの奥旨ハ通達さんと志しるこ性質
鈴剣を弄ずるを好み良工の利鈍を見る射ハ手にて性
もるが如く手先凛々を論て矢ひ楽むの癖あるを志ま
ども家貧して己れ剣一口ぶ求ること能ざるを常に嘆息
しるが同じ里西一人乃婆婦あるが一口の名剣を持伝へ

しるまでこれをのみ常多ハ曹吉見生ずしく思ひ三年家にして
詞を卑して一絶を吉ぶ求めるまでハ婆婦妻ざるのうの心を
箱の中より古き物乃袋ハ入れ三尺余の剣乃解り異邦
乃物と見へる紙出ふるまして板ハ二枚ぶ神光
繁紙にして ひらく紙照し解めるに玉兎と鐫射ふ曹吉驚見
はるを一枚家ハ求める希代の宝剣めるべしと思ひ
るべし名ハ何と記めるを婆婦答を申すとゆるして
芝紙見るまでハ文字のうち古び塩つて積ぐ紀とよく思ふを
して見るまでハ王兎金烏乃宝剣二口と見しく祝しまでで
金烏の剣ハ焼ふ求ひるまでく玉兎ハ求ふ婆婦答て以ふ家
亡夫呉邦ぶ人より妙彫と傳へ二口ぶ剣を授まして不幸

あしてこれを小枝につかせ世にうりあるべきに先ず西園の武士
をうり性あるハ記げをうりがんを金鳥の剣を鍛く為をもつゆ金十
片の價とうりそうをまこと形ぬ婦人乃持て給
ふき物ハ何まで價を教ふ人あるべ賣るべ
烟を求つるかたまるかいつ小曹吉頭ハ
まこと名あるべ価の出べき計ハ一結まで金人の
多小ふるべ蹴ん行の我ハ求めべ價いの程を望
申面をとうう婆婦いふ小賣ハ價と同じく金千片を
らで賣ん俳徊幼童ふ子ハ曹吉をなす家ハ
行ハ園ハうまて劍をもむやと呼あれ曹吉ハ人今我
父農業をなすべ人ハ抵系ハ官ハ

付く功名をあ一部ハ再奥せんとおもふ志ハ父今年
少も行く我計較て仕劍ともあん必ず余人ハ為ハ
かまて給て呼ハ市ハ婦ハ為ハ父も負ハ
行ハ賣ハを降ん乃ハ人乃ハ又頼小ハ
家ハ曹吉ハ我ハ十序の重を負ん家ハ
ども出べき拾ハ父ハ計ハ出ハ行ハ良劍を求く義
なハ辺ハ出ハ方ハ拾ハ忽意を業ハ又同ハ里
ハ為ハ民部なハ俳小ハ乃ハ丹弘
出ハ小孫ハうて家小ハ為ハ若ハ者ハ
実父の部ハ貧く業小ハ為ハ求ハ小ハ
為ハ方ハ為ハ求ハ為ハ
為ハ為ハ一下字も知ハ実父ハ方ハ書

翁は年まだ幼年なれども心易きゆへ打ちくつろぎ宗吉を招きそこらを漫
しめ又盃を出だして酒あまたすすめ宗吉はそれを遠慮して
あの一人の花子は我屋の衣服を縫ひ物して花子は美
さしめ遠慮なく成るまゝ使の体をつくろひ兼て見覚えの
さてさて無ぶが実父の方より来る手紙にて花子に対を
丹州より来るまゝふてと無沢が来ぬをいぶかるもの如く宗
吉を招きて言葉とよもめ者共父久しく病中にて苦し
めどと針灸の林みとぼ一番我世両の金を縫ぐとなる
又稼ぎ場の思惑のと無沢伝の思惑も和く父乃病くゆえ
中なるもどきもあうるうんと十両の金を出し宗吉に手間の手数
をかけたことあるやとこの宗吉義くるえへの書すすめも

遠ふてこゝろ〻と言ふて宗吉に金を出ぶ宗吉宗吉辞ぜ
通書を使ふ所へ仕繰せうと宗吉ハ花子に渡ひ
ひ郎聖の人あき而ゆく手紙渡すべくとつ〻ざるがあくふ
て花子ハ行ゐんとするふ引留て手を渡さくいで花子あざ笑
ひ郎働きふりて奪ひし金汝ゆ与べきこゝ〻れ〻言葉の二言
かひそと出ひそ行んとするバ宗吉大こゝふ怒りるかゝ人金
を打ちうんと殺四〻婦の胴を割て汝一人法外なるを金
を渡さぐば出さぐば神をとりて放さぐ市まで来ぬ小林
とつまりて遊侍の流を人押倒して行るうんとするゆ郎よりて
又引留るゝふ者も投ぐて行るゝふ宗吉力及ざるべ変
るく途方なくふ両手持べき程の石をとりて手の内ふ打付る

[illegible]ち急ぎよりて、ひのと[illegible]で例を
[illegible]を天集ひ[illegible]けるが早面色
[illegible]大[illegible]き[illegible]の神の
[illegible]し[illegible]より[illegible]
[illegible]金を[illegible]
[illegible]婦[illegible]
[illegible]金を[illegible]
[illegible]携へ[illegible]て父母に[illegible]
[illegible]遠ひ[illegible]事[illegible]
[illegible]の剣
[illegible]

行跡紀[illegible]者[illegible]ん下回の引解をうべし

第二回

宗吉街上讀兵書
暨物洛中誇劔術

天乃高さを窺ふべし地の廣さも測るべし面式剛にして知り難きは人心なり奇古利宗吉恐さにて小人信者を禁せず変[illegible]
親しく[illegible]を[illegible]を[illegible]
[illegible]屋[illegible]
くして二[illegible]
[illegible]一人の[illegible]
便りもなく[illegible]
市[illegible]

濃き心を解て往とをぐらく戸あをとて茅屋をのこめくらくてを
須臾田園荒て松菊の淋しきをきゝあてゝ蓬蒿を遠迎ふ姿ふ
士あり南村士高下ゆく〳〵まつたに列をなら者ありうー
かゞ海内歌を引と自負天をあぐ一けま元亨昌を雅と
すゝ私なー賢相あり自ら嘆て曰ふ須の天に幸ゞ彰ふ
御史を俳徊ーきゝ曹子孫を接續ーて来ふ遥命吉さ
やうふ〳〵意義を知こひ〳〵やうかゞ〳〵の間を見
いまゝふ御貌を麗ふ〳〵ーかゝ〳〵ふ〳〵ーいまゝ
年知命にもゝぶも二人の男子ありてあゞ男子のけまゝ如何なる人
五十
のゆかゝやかゝる者をゝ員園の中に老ーむとて惜むゞと思ふ
ゝ倩ふ招ゞ〳〵ゝ相と同ゞと少年にもひ二年に孫田賢相

幼ゝ深く細柳を折ゝ久く蒼茫の服をたゝ光ふ
思ふ俳徊すゞれて孫子を伝ふ云義あらゝ
ゝふを感ずゝの俳ふ所以あて〳〵雅参ーの〳〵云ふ
曹吾ゝ意志を尉ー僕ゝ氏系和〳〵ゝず弓矢に推りし
弁ゝ天思深くして媚妓の偽ゝと美花柳の美ふ沉酔て
醒ゝ事を紛ふゆく父母親族ふを思ゝ〳〵ゝ戒すゝ
ゝ国を周ゞふゝ〳〵ゝ義ゝ〳〵ゝ深ゝ果幸ゝ兵ふ西ふ
今おゝを悔ゝ〳〵ゝ申愛ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
やふ深ゝけゞ賢相ふ〳〵ゝ哀情の情を起ー古の名将英ゝ
ゝぶゝ〳〵ゝ歎ふ遠ー例あゞ青年ゝ足ー一見過ふゝ
深く責ふふゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

劉備苦しうぞ思ひ給へる。あるじ小者にて一盃の薄酒を飲て積年の
恩をもつて是を謝し奉る。あるじ小者にて是を謝し奉る。
乃大石丹に惠き作の墨すこしの日あり今日関ヶ原にて行
の幸ひ出まに如ん尚世に出に名聞の高きを願ふ出おの本望非
蓬頭垢面襤褸の衣を纏ひ豊臣の倉に到る思ひ中に涙し
ばしば濡るとなれて変じぬ心を知る人なく友行く苦しかるべきまでを
誘ふ我屋に帰り来る豊を作きて名書のことを作る
曹吉ぞ急ぎ流るが如く悪くして程まるべき(ぬ)堅牢も
こを敗ち滅んと却も存ぬ右に衛に作る未確原宮
伯川の先陣を切る我に関を重きて城拒し山城守に付く
小屋漫編ひるまと弱く曹右衛門の要く

すべ大将士卒心を一つにして卒定の心を遂げて勇ぐべき
如も軍令に背ず指揮に従く駆るも引るも生れ命を陣
伍を乱さず戦ふ様ひ様の如くるる人今世に立ち如くるまでこそ一番
乃切城金り部屋先の進し味方の旗を敗き出てみど
まて先登せしの城堂にて切あるべきば旗を捨ひ手弱
婦人の如くもうも情に人を勿ちる闘く死戦とふさんと
ぜ一気に如くも諸卒こまかなる名を敗く心一致う
で陣中紛乱して瓦解あく勇ん者の統率ひのまに
つぐも行ぞ敵を征すこを清んやかる士ひまで迷ふそを別
軍つよけ〳〵て法令を正すべし義信も亦戦勝攻取世
く良将の堂かくまで責罪ふ〳〵かんや必ず後世附書の

高流うんと流けまバ監物いよ〳〵こゝ才智を感ぜ〳〵我ゝ
序教百の門人教授すまでも海が如くまるまりてかくまでし
書の旨ふゝるを通じうるものを只千万〳〵すて学で天下
古今軍師をかゝまど、事〳〵師弟約盟ひつゝ都ふ伝ひし秘書
奥旨おてぐを授くべ〳〵毒こ孫衰美しけるふ宗吉も法ら
らぬ恩恵の洞を謝し正教を厭ひ事まどんが歩く法法
して弟子の禮を執んと言へけまバ監物もよ元門人をとゝ
つゝ弁びおるまてうこ都ふ宗有ればうあかち門人ら
て心を深教授しもまば只伝遠て業大ふ進まる

両剣奇遇巻之一終